

朝鮮侵略				
出版社	頁	項目名	記述	コメント
大阪書籍	91	秀吉の海外政策(秀吉の朝鮮への侵略)	<p>秀吉は、1592年、明を攻めるため、その道すじにあたる朝鮮に九州の大名を主力とする大軍を送りました。日本軍は、朝鮮国内の乱れもあって、まもなく首都の漢城(ハンソン・かんじょう)(今のソウル)や各地の都市を占領しました。しかし、侵略に抵抗する民衆などが兵を組織して、各地で日本軍を苦しめるようになり、さらに明の援軍も加わりました。</p> <p>こうして戦争が長引いたので、日本軍は休戦し、兵の一部を残して引き上げました。ところが、明との講和の話し合いがまとまらず、秀吉は再び兵を送りました。しかし、苦戦が続き、秀吉の病死とともに全軍が引き上げました。</p> <p>2度にわたる戦いは、朝鮮の民衆に多くの犠牲者を出し、田畑が荒れ、ききんが続きました。日本国内でも、武士や百姓が重い負担で苦しみ、大名のあいだでの不和も表面化して、豊臣政権の没落を早めることになりました。⇒朝鮮をはじめとする日本と外国の関係は、この後どのように変わったのか、考えてみよう。</p>	「朝鮮国内の乱れ」が具体的に何を指すのか不明確である。日本軍の侵攻が容易であったのは、そもそも朝鮮国内が乱れていたからだとの誤解を生む可能性がある。
	91	写真	[蔚山(ウルサン)城の戦い]佐賀県鍋島報効会蔵 日本軍がつくった城を、朝鮮軍が攻めているようすです。今でも、日本軍がつくった城の石垣などが残っています。	
	91	写真	[亀甲船(復元模型)]倭寇対策として考案され、のちに改良された軍船です。朝鮮の水軍(海軍)は日本の水軍を破り、日本軍の補給路を断ちました。	
	92	安土桃山時代の文化(桃山文化)	秀吉の朝鮮侵略のさい、朝鮮人の陶工が日本につれてこられました。これらの人々によって、有田(佐賀県)・萩(山口県)・薩摩(鹿児島県)などに技術が伝えられ、優れた陶磁器がつくられるようになりました。	
	92	写真	[有田焼]東京国立博物館 有田焼は、李参平(イチャムピョン・りさんへい)をはじめとする朝鮮人の陶工によって始められました。佐賀県有田町では、毎年、李参平をまつる行事をもよおしています。	

教育出版	79	天下統一(秀吉の外交と朝鮮侵略)	<p>また、明の征服を計画し、朝鮮に協力をこたわられると、1592年、朝鮮に15万人の兵を出しました。日本軍は、たちまち朝鮮の都を占領しましたが、民衆の抵抗(注)や、李舜臣(イスンシン・りしゅんしん)のひきいる水軍の反抗などでいきづまりました。日本軍は各地で敗戦を重ね、秀吉の死とともに兵を引きあげました。</p> <p>7年間もの戦争は朝鮮の土地を荒らし、日本の武士や民衆は重い負担に苦しみました。このとき日本軍が朝鮮から連れてきた陶工によって、磁器がつくられるようになり、うばった書物によって、朱子学がいつそう広まりました。</p> <p>(注) 朝鮮の都が陥落したころから各地で民衆が立ち上がり、日本軍と戦いました。これらの民衆は義兵とよばれました。</p>	基本的な経過説明として、明軍の参戦、日本と明との講和交渉とその決裂、1597年の再侵略という事項が触れられていない。
	79	耳塚(写真)	秀吉は、朝鮮で手がらをあげた証拠として、人々の鼻や耳を日本にもち帰らせました。この塚はそれらを埋葬したものです。	
	79	姜沆(カンハン・きょうこう)と藤原惺窩	姜沆は、朝鮮侵略のときに、日本に連れてこられた学者でしたが、1600年に帰国することができ、多くの門人を教えました。いっぽう、藤原惺窩は、戦いがつづいて世の中が乱れていることに心をいため、政治思想としての儒学を深くまなぼうとしていた僧でした。中国で儒学にふれようと、一人で中国をめざして失敗したほどでした。たまたま、日本に連れてこられた姜沆と知り合い、3年間の親交を通じて儒学の理解を深めました。惺窩は、後に、徳川家康にも講義しました。	
清水書院	98～99	秀吉の政策(秀吉の対外政策)	秀吉は、全国の大名を従えと明への侵略をくわだて、朝鮮にも服従してともに戦うことを求めた。これを朝鮮が拒否すると、1592(文禄元)年、秀吉は16万人の大軍を朝鮮におくった。日本軍は漢城(いまのソウル)から平壤(ピョンヤン)へと進出し、明の国境近くまでせまったが、朝鮮各地の民衆の抵抗、李舜臣(りしゅんしん)の率いる水軍、明の援軍などによって苦戦し、休戦して退却した(文禄の役)。1597(慶長2)年、ふたたび秀吉は朝鮮を攻めたが、翌年、秀吉が病死したので、日本は兵を引き上げた(慶長の役)。この2度にわたる出兵で、大名や民衆の受けた負担や打撃は大きく、豊臣氏の力は急速におとろえていった。	明への「侵略」という用語を使用しており、秀吉の対外政策の侵略性を本文の記述により反映させているが、明との和議交渉が失敗に終わったことに触れていない。
	98	秀吉の朝鮮侵略(別枠)	7年間にわたる侵略を受けた朝鮮では、国土や文化財が荒らされ、産業を破壊され、一般民衆も含む多くの人命がうばわれた。また、儒学者や陶工など2万人以上の朝鮮人が日本に連れてこられ、朝鮮のすすんだ儒学や陶磁器の技法が日本に伝えられた。なかでも陶磁器の技法は、のちに萩焼(山口県)・有田焼(佐賀県)・薩摩焼(鹿児島県)など各地でさまざまな焼き物として発達した。また、朝鮮に攻めこんだ日本の武将のなかには、この出兵に疑問をもつ者や朝鮮の文化に感銘を受け、朝鮮軍に味方した者もいた。	朝鮮側の被害について、文化財の荒廃、産業の破壊などに言及していることが評価できる。また、朝鮮軍に味方した「降倭」の存在など、朝鮮侵略の多様な側面について目配りできる内容になっている。
	98	図2	[秀吉の朝鮮侵略地図] 朝鮮ではこの二度の戦いを壬辰・丁酉の倭乱とよぶ。(「民衆の抵抗がはげしかった地域」書き込み有り)	
	98	図3	[朝鮮水軍の亀甲船] 船体を鉄板でおおい、秀吉軍を苦しめた。写真は韓国士官学校にある復元模型。	
	98	図4	[耳塚] 秀吉は朝鮮での戦いのてがらを示すために、敵の遺体から耳や鼻を切り取っておくらせた。それを集めて供養した塚。(京都市方広寺)	生きている一般の人の鼻も切ったという。
	98	図5	[朝鮮人陶工によってはじめられた陶磁器の産地]	

帝国書院	97	秀吉の政策による近世の幕あけ(秀吉による朝鮮侵略)	<p>全国統一を果たした秀吉は、さらに領土を広げるため、明を征服しようとして、1592年、15万人の大軍でまず朝鮮へせめ入りしました。日本軍は、首都漢城(かんじょう)(今のソウル)など各地を占領しましたが、朝鮮民衆による義勇軍や、李舜臣(イスンシン・りしゅんしん)のひきいる水軍の抵抗が強く、明の援軍もあって行きづまり、講和を結んで引きあげました。1597年にふたたび出兵しましたが、日本軍の苦戦が続き、秀吉の死によって、全軍が引きあげました。</p> <p>この侵略で、朝鮮各地は焼かれ、多くの文化財が失われました。また、多くの人々が殺され、人口も激減しました。日本軍の戦死者も多く、日本側にも大きな負担となりました。しかし、このとき、とらえられた朝鮮の儒学者が日本の学者に儒教を教え、連行された陶工によって陶磁器づくりが伝わるなど、その後の日本文化に大きな影響をあたえました。</p>	「講和を結んで」とあるが、朝鮮はもとより、明との講和自体も実現はしていないので、史実として誤りである。
	97	図4	[秀吉の朝鮮侵略]	義兵のうごきは地図になし。
	97	写真5	[釜山城の戦い] (「東萊府殉節図」) 小西行長の軍が釜山城を包囲し、攻撃しているところです。朝鮮の画家がえがいたものです。	
	97	写真6	[復元された亀甲船] 表面を板でおおい防備を固め、竜頭から大砲を撃つことができました。⇒ちよつとかわった船だね。朝鮮軍はどうしてこのような軍艦をつくったのかな。	
	97	写真7	[耳塚] (京都市) 日本軍は、てがらの基準が、敵の耳や鼻の数であったため、多くの朝鮮の人の耳や鼻を日本に送りました。秀吉は、塚を築き、僧侶500人を集めて供養を行いました。	鼻切りをさせた張本人がこのような供養を行った意図として、自らの慈悲をアピールするという側面があったことを説明しないと、行為の非人道性が薄まってしまう可能性がある。
	97	やってみよう	秀吉の側近になって、次の政策について助言をしてみよう。助言は秀吉に賛成するものでも、反対するものでもかまいません。①刀狩令 ②太閤検地 ③朝鮮侵略	現行版では応用学習として韓国の教科書に秀吉の侵略がどう記述されているかを紹介し、朝鮮の立場から侵略をとらえてみようとする試みがなされているが(「韓国の教科書にみる朝鮮侵略」)、その部分がこの「やってみよう」にかわってしまった。
	99	武将や豪商が競った文化(朝鮮半島から伝わった文化)コラム	「わび茶」がさかんになると、朝鮮で焼かれた茶碗などの評価が高まり、諸大名は競ってそれを求めました。諸大名は、朝鮮出兵で陶工たちをつかまえて、良質な陶土の産地につれていき、茶の湯に必要な茶器などをつくらせました。(朝鮮半島から伝わった茶碗(東京国立博物館蔵 一写真) (朝鮮人陶工の李三平をまつる陶山神社(佐賀県有田町) 一写真) (日本の陶磁器の主な産地(朝鮮の陶工による焼き物のおもな産地) 一地図)	朝鮮の陶工を連行した大名側の意図を明記しており、強制的な連行の背景がよく理解できる内容になっている。

東京書籍	87 兵農分離と朝鮮侵略(朝鮮侵略)	<p>秀吉は、国内統一だけでは満足せず、朝鮮、インド、ルソン(フィリピン)、高山国(台湾)などに手紙を送り、服属を求めました。1592(文禄元)年には、明(中国)の征服をめざして、朝鮮に大軍を派遣しました。日本軍は首都漢城(ソウル)を占領して朝鮮北部に進みますが、救援に来た明軍におしもどされました。また、各地で朝鮮の民衆による義兵が抵抗運動を起こし、朝鮮南部では、李舜臣(イスンシン・りしゅんしん)の水軍が日本の水軍を破り、日本からの補給路をたちました。</p> <p>このため秀吉は、朝鮮南部に軍をおいたまま、明と講和交渉をしますが、皇帝の国書の内容に不満をもち、ふたたび戦いを始めました。日本軍は苦戦し、秀吉が病死すると、全軍に引きあげが命じられました。7年にわたる戦いで、朝鮮では、多くの人々が殺されたり、日本に連行されたりしました。日本の武士や農民も重い負担に苦しみ、大名の間の不和も表面化し、豊臣氏没落の原因となりました。★この戦いするとき、朝鮮から、これまでの日本の印刷技術とちがう、活字印刷術が伝えられたんだよ。</p>	<p>後段で義兵や水軍についても触れているが、「明軍におしもどされました」という表現は明軍の役割のみを評価するものと誤解される可能性があるのではないか。(【総論】参照)。</p>
	87 歴史にアクセス-有田焼のルーツ	<p>有田焼を始めたのは、朝鮮に兵を出した大名が連れ帰った陶工たちでした。かれらによって、優れた技術が伝えられ、有田以外にも、のちに各地で名産となる磁器や陶器が生まれました。佐賀県有田町には「陶祖李參平(イチャムピョン・りさんべい)」をたたえる石碑が建てられています。有田焼のように、朝鮮から連行された陶工によって始められた焼き物には、ほかにもどのようなものがあるのでしょうか。(写真-有田焼の壺)</p>	
	87 李舜臣(写真)	<p>李舜臣は朝鮮を救った英雄として、現在も韓国の各地に像が建てられています。(ソウル)</p>	
	87 肥前名護屋城(挿絵)	<p>秀吉は、朝鮮侵略のための拠点として肥前国(佐賀県)に名護屋城を築き、加藤清正、小西行長など多くの大名を派遣しました。名護屋城は、当時では、大阪城に次ぐ規模で、周辺には、徳川家康などの諸大名の陣がつけられました。(肥前名護屋城図屏風 佐賀県立名護屋城博物館蔵)</p>	
日本書籍新社	102 秀吉が朝鮮を侵略する(秀吉の朝鮮侵略)	<p>自分の勢力を外国にまで伸ばそうと考えていた秀吉は、国内統一をなしとげると明の征服をくわだてた。秀吉は、1592年、その道すじにあたる朝鮮に諸大名の軍勢15万人あまりを侵入させた。秀吉軍はまもなく漢城(ハンソン)(今のソウル)などを占領し、明の国境近くまで攻めこんだ。しかし、朝鮮の民衆が各地で立ち上がり(義兵)、やがて水軍の力もまてきたうえに、明の援軍もあって、秀吉軍はおしもどされた。そこで秀吉は休戦し、講和についての話し合いに入った。しかし講和が成立しなかったため、秀吉はふたたび戦争をはじめたが、苦戦がつづき、秀吉が病死したので、全軍が引きあげた。</p> <p>秀吉軍にしたがって朝鮮へわたることを命じられた一人の僧は、日本軍の残虐なふるまいに出くわし、「野も山も焼きはらい、人を切り、人の首をしる。そのため、親は子どもをなげき思い、子どもは親をさがし回るあわれな光景を見た」と日記に記した。→秀吉の朝鮮侵略はなにをもたらしたのだろうか。</p>	<p>事実関係として、講和交渉が明と日本の間で行われたことを記す必要がある。「朝鮮日々記」を引用することにより、朝鮮侵略の非人道性について一歩踏み込んだ内容となっている。</p>
	102 朝鮮の水軍(写真)	<p>水軍の総大将李舜臣(イスンシン・りしゅんしん)はしばしば秀吉の軍を苦しめたが、最後は弾丸にあたって戦死した。今も救国の英雄とされている。写真は亀甲船の復元模型 → 朝鮮で李舜臣が英雄とされるのはなぜだろう。</p>	
	102 地図	<p>日本軍の進路と朝鮮義兵軍</p>	
	102 耳塚(写真)	<p>大名が手がらの証拠として、朝鮮人から切り取り、秀吉のもとに送った鼻をうめて供養したもの。これが耳塚とよばれるようになったが、その理由はわかっていない(京都市)。</p>	
	103 秀吉が朝鮮を侵略する(桃山文化)	<p>…朝鮮侵略のとき、日本へつれてこられた朝鮮の陶工も、有田焼(佐賀県)などをはじめた。(写真-有田焼)</p>	

日本文教出版	76	天下統一への道(海を越える秀吉軍)	全国の大名を従えた秀吉は、明を征服しようとし、まず朝鮮に二度にわたって大軍を送り、朝鮮や明の軍と戦った。しかし、朝鮮の人々の強い抵抗で苦戦がつづき、秀吉の病死とともに全軍が引き上げた。朝鮮の国土は荒れ、多くの人命が失われた。このときすぐれた陶工らが日本につれてこられ、陶磁器の技術を伝えた。	
	77	李舜臣(銅像の写真)	水軍を率いて、日本の水軍を破った。朝鮮を救った英雄として、現在も各地に銅像が立てられている。	
	89	井上さんたちの地域の歴史調査(唐津)	この地方で焼き物が作られ始めたのは、室町時代だそうです。その後、安土桃山時代に茶の湯がさかんになったことから発展し、とくに豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に、朝鮮半島から陶工が連れてこられ、多くの窯がつけられました。・・・/唐津という地名は「韓津」にちなんでつけられたといわれます。ここは、朝鮮(韓)との交通の要地でもありました。	
扶桑社	97	秀吉の政治(朝鮮への出兵)	約100年ぶりに全国統一を果たし、秀吉の意気はさかんだ。秀吉は、中国の明を征服し、天皇とともに大陸に移り住んで、東アジアからインドまでも支配しようという巨大な夢をもつにいたった。1592(文禄元)年、秀吉は、15万あまりの大軍を朝鮮に送った。加藤清正や小西行長などの武将に率いられた秀吉の軍勢は、たちまち首都の漢城(現在のソウル)を落とし、朝鮮北部にまで進んだ。しかし、朝鮮側の李舜臣(イソンシン・りしゅんしん)が率いる水軍の活躍、民衆の抵抗、明の朝鮮への援軍などで、不利な戦いとなり、明との和平交渉のために兵を引いた(文禄の役)。しかし、明との交渉はととのわず、1597(慶長2)年、秀吉はふたたび約14万の大軍を派遣した。ところが、今度は朝鮮南部から先に進むことができず、翌年、秀吉が死去し、兵を引きあげた(慶長の役)。2度にわたって行われた出兵により、朝鮮の国土や人々の生活は著しく荒廃した。この出兵に、莫大な費用と兵力を費やした豊臣家の支配はゆらいだ。	「巨大な夢」の内容は、秀吉の祐筆山中樞内が豊臣家の女中にあてた手紙に依拠するものと思われるが(秀吉から秀次宛二十五箇条覚書、清正宛九箇条指示にも天皇の北京行幸は述べられている)、作成されたのはソウル陥落以後であり、この史料をもって秀吉が侵略当初からこのような構想を具体的に持っていたとすることは証明できないので、教科書に記述するのは不適当である。
	97	地図	[朝鮮出兵地図]	
	97	写真	[有田焼]このころ、捕虜として日本に連れてこられた朝鮮の陶工によって陶器の技術が伝えられ、茶の湯の発展にもつながった。	